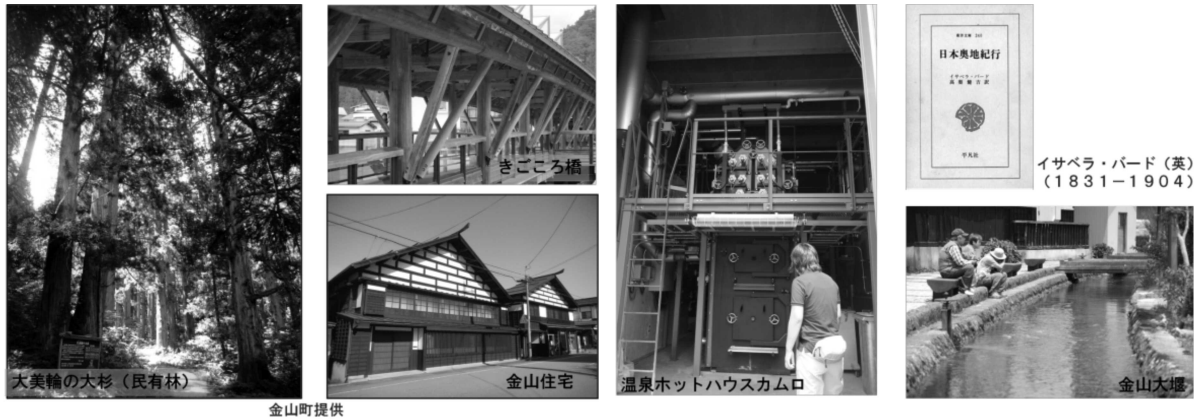


現で描写されていることでも有名である。

また、昭和から国有林野職員の交流人事を行ってきており、現在も出向者を受け入れるなど、国有林とのつながりが強い町でもある。

国有林野の一般会計への移行を踏まえ、育樹祭という大きなイベントを控えた中、国有林として地域からはどのようなことが要望され、どのような形で応えることができるか、民有林との連携を模索しつつ対応してきたので紹介する。



3 取組の成果

1) 自然観察教育林の活用

金山自然観察教育林は最上支署管内の北東部に位置しており、標高400m～800mにかけて薪炭材を生産していた二次林から、自然状態の樹齢140年を超えるブナ林まで、多様なブナの遷移過程が観察できる場所である(図2)。景観整備として展望台周辺の枝の刈り払い等を行い、必要に応じて町と共同で散策道の整備・維持管理を行い、さきの「遊学の森」で行われている自然観察会に対するフィールド提供も考えている。



図2 金山自然観教育林内のブナ林

2) カタクリの里整備

自然観察教育林として設定している入り口から隣接する民有地にかけてカタクリ群生地がある。

民有地側は「遊学の森」が「カタクリの里」として自然観察会などで使用するために歩道を整備しており、そこに国有林側を加えることでプログラムを充実させたいと

考えている。当支署では、町を実施主体とした貸付を想定し「どの様な整備をしたいのか、どの程度の面積が必要か、国有林内で行うプログラムの内容」など具体的な事項を整理しながら対応していく。

3) 有屋峠街道の整備

最上地域の自然教育団体であるNPO法人「ネイチャーアカデミーもがみ」と「遊学の森・森の案内人会」が中心となり、有屋峠街道の検証を行っている。

有屋峠とは奈良時代から、金山から雄勝へと抜ける道として利用されていた峠で、戦国時代や戊辰戦争の際にも、国境の神室連峰を越える要所として戦の舞台となってきた場所である。街道としては現在も登山道として利用されている通説と、登山道よりもなだらかな尾根伝いに行く俗説の道があると考えられており(図3)、2つの道についてどちらが本物であるとするのではなく、2つのルートがあってもおかしくないと捉え、整備を進めたいと考えているようである。平成24年度に入林許可を提出し「俗説のルートをはっきりさせたい」として現地踏査を実施しており、来年度以降は貸付を含めた手続きを視野に入れ「現地ルートの再確認などを行う」旨打ち合わせを行った。

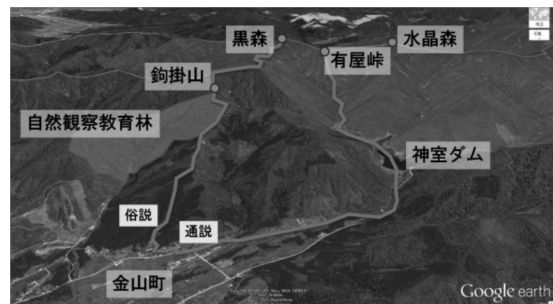


図3 有屋峠の通説・俗説のルート

4) 全国育樹祭への協力

山形県での育樹祭は、昭和63年に山形市・山辺町の「県民の森」で開催されて以来となり、同じ県で2度開催するのは全国で初めてである。

また、全国育樹祭で育まれる「森づくり」の気運を、平成28年度に山形県での開催が決定している「全国豊かな海づくり大会」へとつなげていくためにも、積極的に準備段階から対応していく(図4)。

全国育樹祭金山町推進委員会へは、委員委嘱を受けた森林官が参加、6月と12月に開かれた会議では、今後想定される課題や沿道の森林景観における整備状況の報告、記念品等の意見交換が行われた。景観対策としては、国有林内のナラ枯れ処理の要望が山形県よりされた。今後県から処理の方法についてなど具体的な話があれば、局保全課との調整を行い、要望に添える協力を行う。

また、最上支署としては、生産事業箇所等の時期などの調整も検討していく考えである。



図4 プレイベントへの参加

4 今後の課題

今回、「遊学の森運営委員会」に初めて参加することとなり、新たに地域の様々な自然教育団体との繋がりが持てたことは大きな成果である。

しかし、国有林としてどんなことが出来るのか・出来たのかを考えた時に、「今まで地域の意見を引き出すことをしていなかった」「身近な存在となっていなかった」ことが浮き彫りとなった。地域との情報交換や支署内における情報共有も不十分であったことから、今後の民国連携に繋げる活動が重要と位置付け、支署全体の意識を大きく変化させ、管内市町村への関わりを考慮できる実行体制構築が課題である。

今後、「遊学の森」（民有林）と国有林が協力しあい更なる連携を深め、森林に対する町民・県民の理解を高め、来年度に控える全国育樹祭への準備等に積極的に協力・対応し成功させることで「地域とともに！」歩み「地域とともに！」行動していく国有林の姿として地域から必要とされる組織でありたいと考える。